平成 21 年 8 月 26 日

博士論文審査結果報告書

報告番号　医博甲第2057号

学籍番号　0527022016

氏　　名　関塚　真美

論文審査員

主　査：　島田　啓子（教授）　印

副　査：　泉　キヨ子（教授）　印

副　査：　笹川　寿之（准教授）　印

論文題名：

Low serum secretory immunoglobulin A level and sense of coherence score at an early gestational stage as indicators for subsequent threatened premature birth

論文内容の要旨：

本論文は妊娠中のストレスを secretory immunoglobulin A（以下 s-IgA）で客観的に評価し、妊娠前半期のストレスと切迫早産の関連を明らかにすること、さらに妊娠前半期の s-IgA やストレス対処能力としての sense of coherence（以下 SOC）が切迫早産の予測指標となるかを評価することを目的としたものである。方法は妊婦 110 名を対象に、自己記入式質問紙調査と血清を試料とした生理学的指標の測定を妊娠前半期・妊娠後半期の 2 回行った。質問紙調査では基本的属性、stress perception scale (以下 SPS)と短縮版 SOC、現在の妊娠経過を調査した。生理学的指標はストレス評価指標として s-IgA を用いた。分析対象者 72 名のうち今回の妊娠経過において切迫早産で治療を受けていた妊婦は 28 名（38.9%）であった。妊娠経過を従属変数とし、年齢、出産歴、喫煙習慣、過去の流早産既往の有無、妊娠前半期の SPS・SOC・s-IgA を独立変数としたロジスティック分析で妊娠経過に影響していた変数は SOC（OR 0.855）と s-IgA（OR 0.224）であり、妊娠前半期のストレスと切迫早産の関連が明らかとなった。また、妊娠前半期の SOC や s-IgA がその後の妊娠経過における切迫早産を予測するための指標となることが示唆された。

審査結果の要旨：

本論文は妊娠中のストレスを客観的指標で評価し、切迫早産の予測可能性を提示した研究である。従来の主観的評価の限界を超えて、客観的評価を導入した本研究は妊娠早期からストレスを軽減する看護介入の重要性を示唆しており、オリジナリティが高く意義のある研究と評価された。またその効果についても評価研究できる発端を提示したものである。しかしサンプルサイズの一部不足が限界として明記されており、今後はその限界を解決すべく臨床事例を蓄積して更なる成果を期待したい。

以上の審査を通して、本研究論文は博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。